

サル的大型捕獲檻運用中に発生した失敗事例

藏元 武藏 (WMO)

1. はじめに

ニホンザル（以下、「サル」という。）は非狩猟鳥獣であるため、捕獲は有害鳥獣捕獲や個体数調整による許可に基づいて実施されています。方法としては、これまでは銃器や小型檻による捕獲がほとんどですが、近年はテレメトリー調査の結果に基づき加害レベルの高いサル群れを選択的かつ効果的に捕獲するための中型・大型捕獲檻や捕獲柵の導入が進んでいる地域が増えています。私が担当しているエリアでも、ここ数年大型捕獲檻の導入が急速に進んでおり、一部の地域では捕獲が成功し、被害軽減に繋がっています。大型捕獲檻は適切に運用すれば非常に効果的な捕獲手法と言えます。今回私が紹介するのは、これまで実施した大型捕獲檻での成功事例ではなく、失敗してしまった事例を紹介します。目的は、読者の方が同じ失敗をせず、成功事例を作っていってほしいからです。なお、本稿で紹介する大型捕獲檻の性能を否定するものではなく、筆者が取り組んだこと、指示したことで失敗を招いてしまったことをお伝えする内容です。

2. 大型捕獲檻の拡張

私は大型捕獲檻を用いてある群れの全頭捕獲を目標に捕獲を実施しました。群れの頭数は63頭、農業被害や生活被害が常習化し、悪質な群れと判定された対策強化が必要な群れでした。大型捕獲檻は、T社のサル用囲い罠（5m×5m）（以下、「サル用囲い罠」という。）1基とA社の遠隔監視操作・自動捕獲システム（以下「遠隔捕獲システム」という。）を使用しました。これまでの経験から、サル用囲い罠1基だけでは、1回の捕獲で檻

に入る頭数は10頭前後です。つまり、捕獲目標を達成するためには、最低でも6～7回以上の捕獲が必要となります。サルは、複数回捕獲を実行すると檻への警戒心が高まり、捕獲効率が下がっていきます。そのため、短期間且つ少ない回数で捕獲することで捕獲目標を達成する確率が高まります。そこで、1回の捕獲頭数を増やすために、檻の拡張を関係行政に提案しました。具体的には、もう1基大型捕獲檻を導入し、連結して設置することです。しかし、捕獲実績がまだない中、檻を拡張する予算確保が難しいと判断され、上述したサル用囲い罠のみで対応することになりました。なんとか檻を拡張して1回の捕獲数を増やしたかった私は、余っていたワイヤーメッシュを使い、天井付きのワイヤーメッシュ檻（1m×5m）を追加設置しました（写真1）。止め刺し時に使用するサル用囲い罠の通行口（写真2）を開けてワイヤーメッシュ檻に移動できるようにしました。これでプラス数頭多く捕獲ができることを期待してしばらく運用しました。



写真1 拡張したサル用囲い罠



写真2 拡張部分へ出入りできる通行口

誘引開始から4か月程経過し、誘引がうまくいってきたので(写真3、写真4)、関係行政と相談のうえ、一回目の捕獲を遠隔で実行しました。



写真3 誘引されたサル



写真4 檻に入って採食するサル

捕獲実行後、檻の中には13頭程度のサルが確認できました。捕獲を実行したのが日の入り前だったため、対応は翌日となりました。早朝、監視カメラでサルの姿を確認し、準備をして再度監視カメラを確認したところ、サルの姿が忽然と消えてしまいました。監視カメラをしばらく見ていましたが、何も動く気配がないので、サルが逃走したと考えました。すぐに現場に行き、檻を確認しましたが中は空っぽ。パニック状態になりながら、檻の状況を確認したところ、増設したワイヤーメッシュ檻の一部が壊され、そこから逃走したようでした。原因は、ワイヤーメッシュとワイヤーメッシュを結合するために使用したU字結束線が錆びており、一部のU字結束線が千切れたことで隙間が広がり、そこをこじ開けて逃走したようでした(写真5、写真6)。



写真5 千切れたU字結束線



写真6 こじ開けられたワイヤーメッシュ

U字結束線は、ステンレスやメッキ加工されていない鉄で、雨の影響で錆びてしまったようです。資材を購入する時に、正しい知識を持って選定できていなかったことが一番の原因でした。その後、ワイヤーメッシュ檻に入るための通行口は封鎖し、既存のサル用囲い罠のみで運用することで捕獲後の逃走はなくなりました。こういった試みは正しい知識を持って取り組まないと、ただ場を荒らすだけであると実感しました。次は失敗しないように、もっと情報収集してから取り組みたいと思います。

3. サルの移動を制限する板の設置

もう一例ご紹介します。サルの生体捕獲を実施するため、ある自治体が保有しているK社の移動式地獄檻（4 m × 4 m）（以下「地獄檻」という。）を使用した捕獲の際の出来事です。地獄檻もサル用囲い罠と同様、天井口が開いており、返しがある檻で、中から出られない構造になってます（写真7、図1）。



写真7 地獄檻



図1 檻の構造

このタイプの檻にサルが入ると、サルを捕まえようとしても、返しと側面の間をサルがぐるぐると逃げまわります（図2）。そのため、サル用囲い罠には返しと側面の間には三角板を取り付けて、サルの移動を制限しています（写真8）。

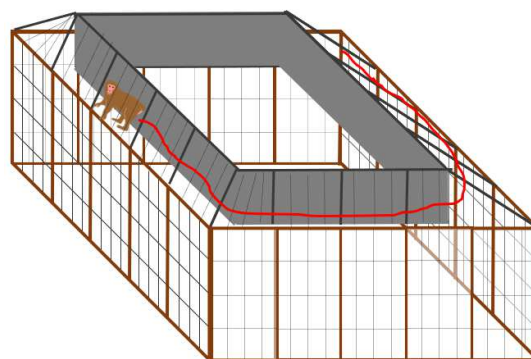


図2 返しと側面の間を移動するサル



写真8 三角版に集まるサル

地獄檻には移動を制限するものがなかったので、自治体にサルの移動を制限できる板を取り付けてほしいと依頼しました。すぐに自治体は板を自作し、檻の返しと側面の間に設置してくれました。監視カメラと遠隔捕獲システムを設置し、後は成獣メスが檻に入り次第捕獲を実行する体制が整いました。設置からおおよそ1か月後、メスを含む計3頭が檻内に入ったため、捕獲を遠隔で実行しました。翌日、GPS首輪を装着するため現場に向ったところ、GPS首輪装着対象であるメスだけが逃走していました。原因を調査したところ、自治体が設置したサルの移動を制限する板が、檻内でサルが暴れたことにより一部破損し、突起ができていました(写真9)。その突起部分をサルが足場として利用し、天井から逃走したことがわかりました(写真10)。



写真9 破損した板の一部



写真10 突起を利用して逃走した形跡

後々考えたら、この板は地面から天井までの長さがあるので、突起がなくても強靱なサルなら登れたかもしれません。今回の直接的な要因は板の突起でありましたが、板の作成について私が自治体に適切な指示をできておらず、また、捕獲実行前に板の状況を確認できていなかったことが一番の原因です。指示したからにはきちんと現場の状況を確認し、抜け漏れがないか確認すべきであったと反省しました。同じことを繰り返さないために、今回の問題点を整理したうえで、次の捕獲に活かしていきたいと考えております。

4. 最後に

大型捕獲檻に設置した監視カメラで撮影された画像の一部をご紹介します(写真11～写真14)。



写真 11 同時に誘引されたシカ、イノシシ



写真 12 カメラを意識するサル



写真 13 幸せそうなシカのカップル



写真 14 続 幸せの絶頂で叫ぶオスジカ
(たぶん)